

修士論文（要旨）
2014年1月

熱中症を発症した高齢者の体験プロセス分析

指導 長田久雄 教授

老年学研究科
老年学専攻
212J6002
太田淳子

目次

I. はじめに	1
1. 暑熱環境の悪化に伴う健康への影響	1
2. 定義	1
3. 気象条件	2
4. 熱中症発症の実態	2
5. 熱中症の病態と危険因子	3
6. 先行研究	4
7. 研究目的	4
8. 研究意義	4
II. 研究方法	4
1. 調査対象	5
2. 調査方法	5
3. インタビューガイド	5
4. 倫理的配慮	6
5. 分析方法	6
III. 結果	7
1. 対象者の概要	7
2. ストーリーライン	7
3. カテゴリーと概念の詳細	8
IV. 考察	27
1. 【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】	28
2. 【自分とは無縁な熱中症】	29
3. 【夜間に生じる脱水】	31
4. 【相談できる・気にかけてくれる存在の有無】	32
V. まとめ	34
VI. 本研究の限界と今後の課題	35

謝辞

引用文献

資料

資料 1 表 1

資料 2 図 1

資料 3 ワークシート集

資料 4 図 2

I. 研究背景と目的

日本においては、熱中症患者の増加が予測されている¹⁾。2010年の熱中症による死亡者数の約8割は65歳以上であった。高齢者が熱中症を発症しやすい身体的要因として、加齢に伴う体温調節機能の低下や脱水に陥りやすいことが挙げられる²⁾⁻⁷⁾。一方、単身、男性、低所得者で閉じこもり傾向にある者⁸⁾や慢性疾患があり社会的に孤立している人、経済的困窮者、独り暮らしは危険因子⁹⁾⁻¹¹⁾との指摘がある。また、要介護認定を受けていないか認定を受けていてもサービスは未利用、自宅に空調設備が無いかあっても使用しない¹²⁾など社会的・心理的特徴と思われる内容も報告されている。これらのことから、高齢者の熱中症の発症には身体的、心理的、社会的要因が作用し、熱中症の直接的な要因である脱水・体温調節の悪化と気象条件に影響することで発症・重症化するのではないかと考えた。しかし、高齢者の熱中症の心理的な要因を明らかにした研究はない。そこで、熱中症を発症した高齢者の体験プロセスから高齢者の熱中症における身体的、心理的、社会的な要因を明らかにする。

II. 研究方法

65歳以降に熱中症と診断され外来受診もしくは救急搬送された体験のある都市部在住高齢者8名に対し面接調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ^{13) 14)}を用いて分析した。桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て調査を実施した。

III. 結果

熱中症を発症した高齢者の体験プロセスは、日常生活中に暑熱環境に一定時間以上さらされ【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】に徐々に陥り、【自分とは無縁な熱中症】と【夜間に生じる脱水】に大きく影響を受け熱中症の症状が出現していた。高齢者は【自分とは無縁な熱中症】と考えているために自分が熱中症に陥っていることに気づかず、適切な予防行動をとらずに【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】を悪化させていた。高齢者は【自分とは無縁な熱中症】と考えているため、夜間のクーラーの使用や水分摂取などの予防行動は昼間よりもさらに行わなくなり【夜間に生じる脱水】を起こし、寝ている間に【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】をさらに悪化させていた。熱中症の症状出現後は【相談できる・気にかけてくれる存在の有無】が受療行動に影響していた。

IV. 考察

熱中症を発症した高齢者の体験プロセスを分析し、生成した概念の中で身体的要因（体力、体格、健康状態、食事摂取状況）、心理的要因（知覚、認知、感情、パーソナリティ、動機、思考、不安）、社会的要因（人との交流、家庭環境、治安、都市化）に分類できるものを抽出し、考察を進めた。

【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】は、身体的要因である「暑さについていけないからだ」が日常生活中に暑熱環境に一定時間以上さらされることで起こっていた。高齢者に日常生活中に発生する熱中症は、ゆっくりと進み、時間が経ってから発症することを啓発する必要性が考えられた。【気づかないうちにゆっくり進む熱中症】には「気づかない」という心理的要因があり、その後の【自分とは無縁な熱中症】【夜間に生じる脱水】にも影響し熱中症を悪化させていた。高齢者自身が「気づかない」うちに熱中症が発生することを啓発する必要性が考えられた。＜リスク要因としての持病＞である高血圧症に罹患している高齢者には熱中症発症のリスクが高いこと、夏季の急激な血圧異常は熱中症に

よる可能性もあることを啓発する必要性が考えられた。

【自分とは無縁な熱中症】は、心理的要因である<関係なし><予防する動機なし>によって<情報と知識の獲得不足>が起こっていた。高齢者が普段から相談したり、気にかけてくれる人や町内会、自治会などの若い世代の人たちにも高齢者は熱中症になる可能性が高いことを啓発する必要性が考えられた。

心理的要因である<自然の風に対する肯定的価値観><もったいないと感じる冷房>が夜間、寝室での冷房や扇風機を使用しないで寝るという行動に大きく影響していた。さらに、社会的要因である<窓を開けても暑い夜>や<防犯のために開けられない窓>にも影響し《暑い寝室》となり【夜間に生じる脱水】に影響していた。熱帯夜における寝室での冷房の使用を啓発することが重要と考えられた。しかし、《暑い寝室》には様々な心理的・社会的要因があり起きていた。高齢者が冷房の使用を控えるのには高齢者なりの理由があるため、その理由を探り、その人に合わせた夜間の過ごし方を検討していく必要があると考えられた。

熱中症発症後は、心理的要因である<改善への期待と症状悪化との葛藤><自ら救急車を要請するためらい><入院へのためらい>が、受療行動に影響していた。しかし、症状の改善がみられず身体的要因である<熱中症より強い持病の症状>の出現によって受療すべきなのではと思っている時に、社会的要因である<受療行動を決断する他者の存在>がいたことで受療行動を行っていた。家族に限らず、友人、近隣の人の中で身近に日頃からその高齢者を気にかけてくれ、異変に気づき、相談にのってくれ、一緒に対応してくれる人の存在【相談できる・気にかけてくれる存在の有無】によって熱中症の重症化・重症化回避に影響していた。

引用文献

- 1) 小野雅司 (2009) : 熱中症の原因を探る. 環境儀, 32 : 12-13.
- 2) 有賀徹他 (2012) : 熱中症の病態生理 . 日本臨床, 70(6) : 947-951.
- 3) 恩田秀賢他 (2012) : 熱中症の危険因子. 日本臨床, 70(6) : 947-951.
- 4) 三宅康史 (2012) : 日常生活と熱中症. 日本臨床, 70(6) : 997-1004.
- 5) 富塚卓也他 (1990) : 高齢者における脱水の原因と病態について. Geriatric medicine, 28 : 509-512.
- 6) 田中康夫 (1991) : 原因からみた老人の急死-脱水による急死-. Geriatric Medicine, 29(3) : 423-42.
- 7) 松月弘恵 (2012) : 高齢者の脱水予防について. 栄養日本, 55(8) : 624-625.
- 8) 舟越光彦 (2008) : 高齢者の熱中症における背景要因の検討. 日本公衆衛生学会抄録集, 67 : 497.
- 9) Bouchama A, et al (2007) : “Prognostic factors in heat wave related deaths: a meta-analysis”. Arch Intern Med, 167(20) : 2170-2176.
- 10) Hausfater P et al (2010) : “Prognostic factors in non-exertional heatstroke”. Intensive Care Med, 36(2) : 272-280.
- 11) Marto N (2005) : “Heat waves: health impacts”. Acta Med Port, 18(6) : 467-74.
- 12) 岩田充永他 (2008) : 高齢者熱中症の特徴に関する検討. 日本老年医学会雑誌, 45(3) : 330-334.
- 12) 木下康仁 (2003) : グランデッド・セオリー・アプローチの実践, 弘文堂.
- 13) 木下康仁 (2007) : ライブ講義 M-GTA, 弘文堂.
- 14) 三浦豊彦 (1963) : 日本の高温労働 - 熱中症小史 -. 労働科学, 39(9) : 437-456.
- 15) 安岡正蔵他 (1999) : 熱中症(暑熱障害) I ~ III 度分類の提案; 熱中症分類の臨床的意義. 救急医学会, 23 : 119-1123.
- 16) 安岡正蔵 (2012) : 熱中症の概念と重症度分類 (特集 熱中症). 日本医師会雑誌, 141(2) : 259-263.
- 17) 中井誠一 (2012) : 熱中症の疫学. 日本臨床, 70(6) : 934-939.
- 18) 田村憲司他 (1995) : 救急搬送データによる熱中症の発生と気温. 日本生気象学会誌, 32 : 111 - 114.
- 19) 星秋夫他 (2002) : 人口動態を利用した発生場所からみた暑熱障害の死亡率. 日本生気象学会雑誌, 39(1, 2) : 37-46.
- 20) 柴田祥江他 (2010) : 住宅内の熱中症に対する高齢者の認知度と暑熱対策の実態. 日本生気象学会雑誌, 47(2) : 119-129.
- 21) 岡山寧子他 (2010) : 高齢者における熱中症予防のための対処方法 - 熱中症既往のない高齢女性を対象にした夏期における飲水行動調査から -. 日本セイフティプロモーション学会誌, 13(1) : 55-61.
- 22) 小野雅司 (2012) : 熱中症患者情報ならびに熱中症予防情報の提供と活用. 日本臨床, 70(6) : 1039-1045.
- 23) 岡山寧子 (1998) : 高齢者における夏期および冬期の水分出納. 日本生気象学会誌, 35(1) : 53-60.
- 24) 小松光代他 (2004) : 日常生活行動の自立した在宅高齢者の飲水量 : 飲水行動要因との関連日本生理人類学会誌. 9(2) : 71-76.
- 25) 伊香賀俊治他 (2012) : 住環境と熱中症. 日本臨床, 70(6) : 1005-1012.
- 26) 三宅康史他 (2008) : 熱中症の実態-Heatstroke STUDY-2006 最終報告-. 日救急医会誌, 19 : 309-321.
- 27) 柴田祥江他 (2004) : エアコン使用の実態と消費者意識についての調査研究. 日本建築学会学術講演梗概集. 861-862.
- 28) 村上由紀子他 (2011) : 住宅内の熱中症メカニズム解明に関する実測と数値解明. 日本建築学会関東支部研究報告集, 81(II) : 137-140.
- 29) 田中英登他 (2011) : 高齢者における冷房環境下の快適性に及ぼす気流の影響. 日本生気象学会雑誌, 48(3) : S82.